

フィリピン英語留学に関する一考察

——ラプラセブ国際大学における留学調査から——

岩 下 康 子

A Consideration on Studying Abroad for English in the Philippines:
Through the Study Abroad Survey at Lapu-Lapu Cebu International University

Yasuko Iwashita

1. は じ め に

2020年3月以降、留学の窓口は閉鎖され、新型コロナウイルス感染（以下、コロナ感染症）対策に世界全体が覆いつくされてから2年半が経つ。海外留学や海外研修旅行は中止となり、オンラインによる留学などの代替案が発出した。2021年統計（JAOS^{*1} 留学統計）によると、日本人留学生15,083人のうち、およそ59%がオンライン留学を体験しており、国別にみるとフィリピンがオンライン留学先として半数を占めている。一方、41%にあたる6,200人の学生は従来型の現地留学を果たしていたことが分かった。留学先としてはアメリカ、カナダ、イギリスで4分の3を占め、根強い英語ネイティブ国の人気とこれらの国が留学生の門戸開放を早期に打ち出したことが背景にある。

Whalen (2020) が述べるように、コロナ禍ではオンライン留学、COIL (collaborative international online learning) などの新たな教育活動に注目が集まり、これらの体制強化や実施能力の向上を提起する声は増加している。しかしながら、情報通信環境の格差の存在は見逃さず、世界レベルで浸透するには難しい面も持ち合わせている。日本国内においてもオンライン教育における教育効果の検証がある一方、コミュニケーションの遮断や教育方法のバラツキといった欠点がクローズアップされ、コロナ禍が落ち着いた現在は対面授業を基調とする授業形態に戻ってきている。オンラインを伴う教育活動は、今後も拡大する可能性を包含するが、対面か非対面かの単一の選択肢としてではなく、対面による講義や演習の中にオンラインを部分的に用いるブレンディッド・ラーニングとして、適宜用いられていくことが望ましいと考えられる。

留学についてはどうであろうか。オンライン留学への検証を試みた岩城・巽 (2021) の研究からは、コロナ禍のオンライン留学に対する学生の姿勢や対応の変化が述べられている。大学入学時より留学を希望していた学生においては、オンラインという選択肢ではなく現地留学を時期を遅らせてでも実現したいと考える者が多数存在することがわかる。また、オンライン留学に対しては厳しい意見が出されており、現地でクラスメートと切磋琢磨する空間の共有、異文化体験と新たな人間関係構築による社会生活などオンラインでは味わうことのできない体験として、現地留学する意義の大きさを改めて提示した。

日本においては厳しい入国制限が続き、入国できない留学生が多く存在した。こうした留学生に対しオンライン授業などが提供されたが、留学の醍醐味とされる現地での人間関係作りや

社会体験から隔絶されたことから、留学の計画変更を余儀なくされた人も続出した。村田(2022)は、コロナ禍における日本の大学で学ぶ留学生アンケート調査を通して、留学生の直面した課題とその中での留学生の学びについて、詳細な調査を行っている。それによると、一定数の留学生はこの未曾有の事態に直面して苦境に立たされたが、それらを跳ね返すかのように様々な工夫を考案し、一層強くなったことを明らかにしている。

なお、日本学生支援機構が提示する統計と OECD、ユネスコなどが発表する統計では留学生の定義が異なる。OECD やユネスコなどでは留学生は学位取得を目的とする者と定義しているが、日本学生支援機構では交換留学や短期留学なども含めて、留学生に計上している。本稿では、ラブラプセブ国際大学が提供する留学を論じるにあたり、日本学生支援機構の留学生の定義を用いていく。

本稿では、2021年に開学した広島文教大学（以下、本学）の姉妹校に当たるラブラプセブ国際大学における留学について、参加学生の調査結果と現地視察調査から留学の実情と学生の留学に対する評価を明らかにする。さらに、今後の留学の可能性について言及し、ラブラプセブ国際大学への留学が学生の自己変容や交流活動にもたらす貢献度について考察する。

2. フィリピンについて

2-1. フィリピンの国事情

フィリピンは7,641もの島々からなる群島国家で、人口は1億903万人を超え（フィリピン統計庁, 2020）、年平均人口増加率は1.63%である。ASEAN 諸国においても近年出生率の低下がみられる中、フィリピンは2.7という高い出生率を維持している。そのため、若い世代が非常に多い人口ピラミッドを構成する。フィリピン人の平均年齢は約24歳で、日本の約47歳と比較するといかに若さに溢れる国かがわかる。

2010年以降の経済成長は6%から7%で推移しており、コロナ禍では若干低下したが、2022年の第1四半期には、8.3%と予想を上回る結果を出している（日本貿易振興機構、以下JETRO, 2022）。これらの背景には、コロナ感染対策の制限措置の緩和によって消費者の生活様式が変化し、宿泊や飲食の回復につながったことが考えられる。

一方で、豊富な人口を国内で賄いきれず、人口の約1割が海外就労者として世界各地に赴く出稼ぎ大国である。ASEAN 諸国ではフィリピンが最多で、2021年には314億ドルを超える額が送金されており、これはフィリピンのGDPのおよそ1割を占めている（Capital Asset Management, 2022）。

産業構造はサービス業に依存する傾向が続いている。第3次産業の中でも、「自動車・オートバイ・個人及び家庭用品の貿易と修理」やIT/BPO（business process outsourcing）を含むサービス業が好調である。しかし、国内の製造業は不振で製造技術は育っておらず、貿易による海外依存で産業が成り立つことに問題を抱えており、製造業の技術基盤や人材の育成はフィリピンの課題となっている。

輸出においては米国、香港、日本が主要な取引先で、輸入においては、中国、韓国、日本と続く。恒常的に貿易赤字を抱えており、先に述べたように製造業が育っていないこと、最大の輸出品目であるエレクトロニクス産業についても半製品を輸入して加工後に輸出する形態が多いことや、エネルギー源の輸入が輸出を超過していることなどが原因としてあげられる（国際協力銀行, 2021）。

フィリピン国内には、サテライトキャンパス421校を含めると高等教育機関数が2,396校ある

(JETRO, 2021)。このうち国公立が246校、私立大学が1,729校である。通常、大学入学は18歳からとなっているが、全国統一テストのようなものはなく、各大学が実施する入学試験に合格することで入学できる。従前は日本の中学校に相当するハイスクールを卒業後、大学へ進学していたが、2011年にはじまった教育制度改革により、現在はハイスクール後に高校に相当するシニアハイスクール2年間が加わり、日本と同様に中等教育期間が6年間となっている。

フィリピンの名門大学といわれる上位10校は、世界ランキングで見ると高い評価を受けているわけではないが、すべて英語教授で行われていることなどが注目を集め、世界中から人材が集まる。国公立の授業料は年間10万円程度、私立大学では45万円程度となっている。セブ島に絞ってみると、サンカルロス大学、セブ大学、セブ工科大学、セブノーマル大学、ビサヤ大学、サンホセ大学、セブ医科大学、サウスウェスタン大学、南フィリピン大学など広島県のおよそ半分の面積の島内に、多くの大学が建設されていることがわかる。

英語語学学校についてみると、認可外とされる学校を除いてフィリピン国内に約400校近くあるといわれている。セブ島にその6割が集中しており、日本人によるセブ留学の人気の高まるにつれ、日本資本の学校も増加してきている。

2-2. フィリピンの英語留学

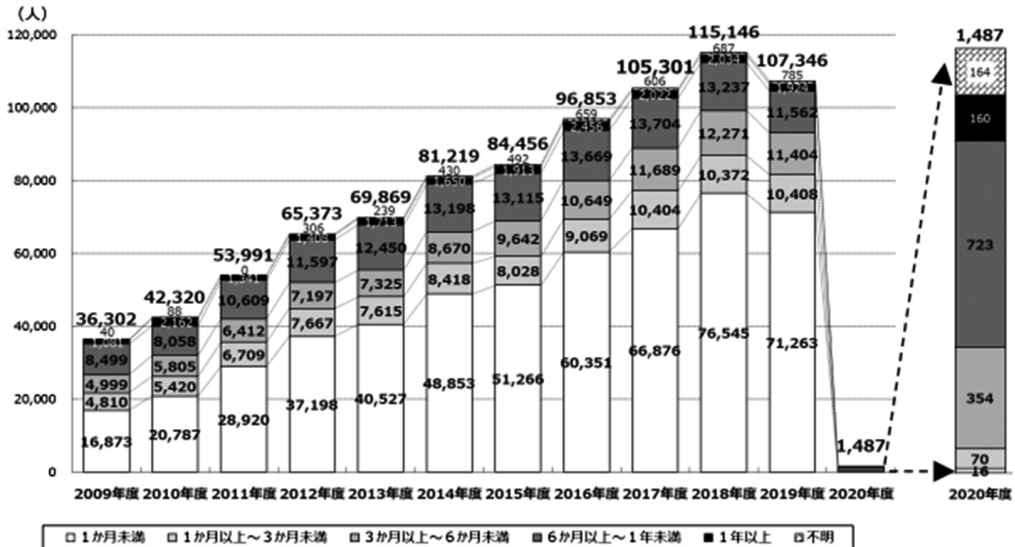
横山 (2019) によると、フィリピン英語留学は、1990年代中頃より韓国人が始めたという。進学や就職に英語を必須とする韓国では、短期で安価に英語を身に付けるための方法としてフィリピンに注目が集まった。韓国の教育熱、英語熱の背景には韓国政府が打ち出した方針転換がある。それらは大学入試制度改革、小学校英語教育の実施などである。日本では、2011年度より小学5、6年生の英語が外国語活動として必修になったが、教科化されたのは2020年からである。韓国では、日本よりはるかに早い1997年に、小学校第3学年以降を対象に英語が必修科目となっている。

韓国の教育改革の背景には、1980年代からのグローバル化の影響や1997年のアジア通貨危機、教育言語としての英語使用の普及、英語ビレッジや英語使用を謳う幼稚園の開設など国内外の社会経済状況の変化がある。英語学習が教育上の大きな関心事となり、欧米英語圏への留学費用より格段に安価なフィリピン英語留学が一つの受け皿としてビジネスモデル化され、短期間で英語力を向上させる英語教育方法が次々と考案された。全寮制のスパルタ教育やマンツーマン授業形式、English Only Policy などがその例である。こうした教育の特徴をまねた語学学校がフィリピン各地に拡大し、英語語学学校ブームへと繋がっていく。

フィリピン政府はこの英語学習としての経済効果を歓迎した。教育観光として「フィリピンESL (English as a Second Language) 産業」と位置付け、観光省が中心となって業界育成と拡大を推進した。しかし、こうしたフィリピンの短期留学が急速に進むと、教育の商品化という問題が持ち上がってくる (小張, 2018)。

小張によると、フィリピン英語留学の特徴は、英語学習のために整えられた教育的特徴と自然環境などを組み合わせた観光資源とを効果的に組み合わせたパッケージ化サービス商品であるという。フィリピンの英語は「多様化」(ネイティブ英語ではないがネイティブに準拠することをアピールした英語)と「標準化」(国際共通語として標準)という言語的特性を持ち合わせている。その上で、フィリピン英語留学の広がりは世界各地の英語変種に対する寛容性の高まりであり、ネイティブ信仰からの脱却が進んだ証拠であると小張は論じている。日本でも特に若い世代を中心に、観光地としてのフィリピンの位置づけや英語教授国としてのインパクトは浸透してきているといっていよい。

図表1) 日本人の留学期間別留学生数の推移



出典) 文部科学省報道発表(2022年3月)「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について

韓国や中国出身の学生は、欧米英語圏での学位取得という最終目標を志す傾向が強い。この目的を遂行するための第一段階として、アセアン英語圏での早期留学を実施し、英語力とアカデミックスキルを習得した後、欧米英語圏に移動するというステップアップ型モデルを選ぶことがよく見られている。

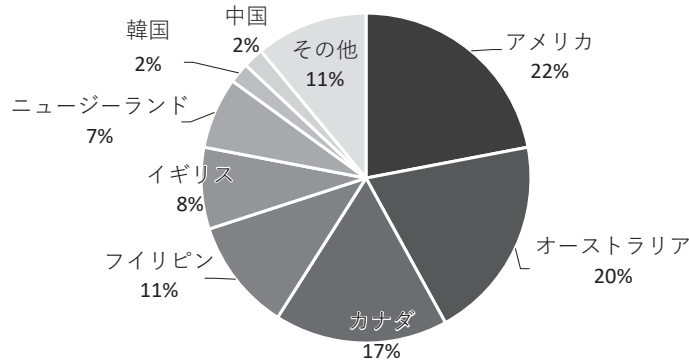
日本においては、学位取得のための欧米留学は減少しているが、日本人学生の英語ネイティブ志向は根強く、欧米英語圏への短期語学留学は一貫して人気がある。2000年代初頭になるとインターネットを介して情報が拡散し、アジア圏への短期留学にも注目が集まるようになる。留学を後押しする社会情勢が高まる中、高額な留学費用を捻出できない家庭の事情が背景にあると思われる。コロナ禍でさらに経済が悪化する中、欧米圏への留学ではなく、アジアにおける英語留学の可能性を探る層は今後も続くのではないかと考えられる。

フィリピン留学の人気は次の理由によるところが大きい。1つは日本から直行便で4時間程度という立地的な条件の良さである。2022年9月現在、直行便はまだ限定的な運航となっているが少しずつ回復していくと思われる。2つ目は、アメリカ、オーストラリア、カナダなどへの留学と比べ、半額以下のコストで留学できる留学コストの安さにある。3つ目は、マンツーマン型や短期集中型で英語を学ぶ選択肢の多様性や自分の目的に合わせたプランを組みやすいという特徴にある。アカデミックな言語学習という目的よりも、実際に外国人と話すための英語、日本国内のインバウンドに役立てるための英語、あるいは社会人の学び直しなど、学習者のニーズに対応したプログラムが容易に選択できることが好評を得ている。

2018年、フィリピンへの日本人留学生は前年比22%増を記録し8,232人となった(JAOSレポート, 2019)。米国への1万7,642人、オーストラリアへの1万6,426人、カナダへの1万3,725人に次いで第4位を記録している(図表2)。日本人留学生8,232人のうち、3か月未満の短期語学留学が6,950人で全体の84%を占めている。

2020年のWHOによるパンデミック宣言以降、フィリピンでは厳重に国境を取り締まり、欧

図表2) 留学渡航先別の日本人留学生の割合



出典) JAOS による日本人留学生調査2019から筆者作成

米諸国が比較的早く留学の門戸を開放した一方で、フィリピンがビザ免除対象国の入国を許可したのは、2022年2月に入ってからである。それまでの間、フィリピン国内の多くの大学、語学学校ではオンライン授業で学習者に対応した。2021年にはおよそ4,300人の日本人学生がオンライン留学と称して、フィリピンの大学や語学学校の授業を受講していたことは、「はじめに」で述べたとおりである。2022年に入るとワクチン接種が進み、コロナ感染症の重症化の懸念が緩和されたことが国境の開放を促した大きな要因であると思われる。入国に当たっては、3回のワクチン接種が完了している場合は、事前のPCR検査が不要となるなど大きな緩和に踏み切った。フィリピン政府観光省によると、2022年2月10日にワクチン接種完了者を受け入れてからわずか10日間で、1万人以上の外国人が入国したと発表している。

2-3. フィリピン英語留学の効果

木村・清水(2016)は、2015年夏に実施したフィリピン短期語学留学プログラム参加者における異文化理解と学習動機付けの変容について調査分析した。事前段階、中間過程、事後段階のインタビュー調査、対象者が書いたジャーナル、及び授業観察からのメモ書きを質的に分析し、言語学習、異文化理解、人々との交流の観点から学習動機付けへの前向きな変容が観察されたと述べている。そして学習への動機付けが固定概念として捉えられるのではなく、短期間でも個人の経験を通して流動的に変容する様子を明らかにしている。

羽井佐・渡辺(2015)の報告では、フィリピン英語留学を通して、「ネイティブスピーカーのように話せなくてもいい。共通語としてわかり易い英語を使うことが重要だ」という明示的な言語態度変容までは見られなかったが、フィリピン人講師の英語に対する寛容性や好意的態度が見られ、それは共通語としての英語(ELF)^{*2}の重要性に対する暗示的な態度変容を示すものとして大きな成果と捉えている。調査の中では、「フィリピン人講師の英語のわかり易さ」という点が学習者から語られており、こうした視点は日本の英語教育にも応用できるものだと考察している。

羽井佐(2017)は、英語変種に着目し、英語が世界共通語として機能を果たす限り、国際コミュニケーションにおいては、英語変種の話者との会話が増加することを指摘する。その上で、日本人が英語母語話者の英語を強く意識している傾向をあげ、これらが英語学習のハードルを上げ、学習の阻害要因となる可能性について述べている。フィリピン英語留学が注目を集めることは、英語が多様化されていることに気づく良い機会であると論じている。

小林（2022）は2つの英語留学先（欧米英語圏とアセアン）を経験した日本人英語学習者を対象に調査を行い、留学移動パターン、動機、2つの英語留学経験から得られた成果について考察している。日本の学生が学位取得を目指さず、短期海外研修を繰り返すことについて、小林は就職への影響をまず挙げる。新卒一括採用方式をとる日本では、大学3年次からの就職活動が大学生生活の大きなウエイトを占めており、この波に乗るための前段階としての短期留学があるという。また、「英語力＝グローバル人材」というイデオロギーに根差して企画された大学主催の短期海外研修プログラムへの参加が奨励されているという。これについては、最終目的があいまいであることを警告すると同時に、これらを与え続ける社会に問題があるのではないかと小林は考察する。次の長期留学を目指したステップアップ型として短期留学を捉える学生もいるが、日本人学生に多いのは旅行感覚の短期留学体験で、最終ゴール設定なくして現地の消費で終わることについての課題は多い。

英語の多様性を受け入れることで、異文化への寛容性を持つ姿勢の萌芽に繋がるという指摘は、非常に興味深い。短期語学研修であっても、留学の効果はその個人の内部で流動的に生起するという報告にあるように、目標を定めた語学留学は多くの学生に推奨する価値は大きいと考えられる。政治、経済及び文化面におけるアジア諸国とのかかわりは今後も拡大傾向にあり、遭遇する英語変種も多様化することから、これらの姿勢を醸成することが教育目標の一つであることは間違いない。

本学が今年度より開始したラブラブセブ国際大学への留学は、従前の英語語学学校が提供していた完全な寮生活、English Only Policy、マンツーマンレッスンの選択肢など英語プログラムの良さを持ちながら、大学教育としての単位互換の保証があるゆえに成立する中長期の留学も可能となる。ASEAN 諸国に対する異文化理解、あるいはアジアの中の日本としての認識が促進され、それらは共通語としての英語を認識する過程の中で十分に育まれていくと期待できる。英語母語話者の英語にこだわるのではなく、英語が世界共通語として拡大し続ける現代においては、コミュニケーションを基調とした英語の捉え方は非常に重要であると考ええる。

3. ラブラブセブ国際大学における調査

3-1. ラブラブセブ国際大学について

ラブラブセブ国際大学は、セブ州マクタン島に建設され、一部未完成の部分を残しながらも2021年9月に開学した。1学年の収容定員を400人に設定し、コロナ感染症の爪痕が残る中の開学となったが、少しずつコロナ禍からの脱却が進む中で多くの新入生を迎える2年目がスタートした。学部構成は、ツーリズムマネジメント学部、理学療法士学部、外国語学部の3学部となっており、「グローバルな実践力を磨く質の高い教育の場」という理念を掲げて、学生の教育に当たっている。

留学生の受け入れは2022年6月に1か月の予備留学からスタートし、7月には本格的な留学生受け入れが始まった。学びのポイントとして、充実した英語教育を第一に掲げている。授業はレベル別にクラス編成され、個人のレベルに即した学習内容と進度によってクラス運営がなされている。また、スピーキング、ライティング、リーディング、リスニングの4技能全てに渡って網羅したカリキュラムが構成されている上に、放課後マンツーマンレッスンの受講も可能である。また、母国の大学の遠隔授業を受講することも可能としており、コロナ感染症後のオンライン授業の可能性を十分取り入れている。

留学生にとっての朗報は、10人1ユニットの個室タイプのシェアハウス寮が完備されている

ことにもある。多くの語学学校では、寮生活は複数学生と居住をシェアすることによって滞在費を節約できるシステムになっているが、ラブラブセブ国際大学では、追加費用なしで留学生には全員個室が与えられ、プライベートが確保されている。また、24時間体制で舎監が常駐し、セキュリティも万全の体制を整えている。

3-2. 留学生調査について

現在、本学からラブラブセブ国際大学への留学者数は、短期留学を修了している者も含めると延べ16名となる。そのうち11名が人間科学部グローバルコミュニケーション学科学生、3名が教育学部学生、2名が人間科学部栄養学科学生となっている。16名を対象に2022年9月、ラブラブセブ国際大学の留学に係る調査を実施し、調査結果から留学の効果と課題について明らかにする。

調査の主要項目は以下の通りである。

- ・ラブラブセブ国際大学に留学を決めた理由
- ・留学の目的
- ・留学の満足度とその理由
- ・留学を通じた英語学習への姿勢の変化について
- ・ラブラブセブ国際大学の魅力
- ・留学生活の全般的な感想

調査票はGoogle Formにて作成し、調査対象者に依頼した結果、13名の有効回答が得られた。なお、個人情報の取り扱いについては十分配慮することを伝え、調査協力は任意としている。

また、2022年9月中旬、筆者はラブラブセブ国際大学を訪問し、授業や寮生活の様子を視察した。「ラブラブセブ国際大学への留学をより良いものにするための実態調査」として聞き取り調査を依頼したところ、7名の学生から快諾を頂き、放課後などに1人当たり30分程度の個別面談を行った。聞き取り調査内容は論文や報告書として公表する予定があることについて了解をいただき、記録を取った。

3-3. 調査結果と考察

留学を決意した理由としては、留学費用の安さが一番の決め手になっており、本学が姉妹校であることの利点が十分反映されている。また、大学のプログラムであることの安心感や単位取得ができること、英語力を高める環境があることについても多くの学生から選択理由としてあがっており、学生のニーズを満たしていることがわかる（図表3）。今後の留学については、コロナ禍を経て経済的な理由による参加が一層難しくなることから、学習者のニーズに寄り添ったプランがより求められると予想される。

留学の目的としては図表4にあるように、「英語力を伸ばすため」が筆頭となっており、次いで「海外体験をしてみたい」「視野を広げるため」といった項目があがる。オンラインではなく現地に赴いて留学することに、学生たちは大きな意義を見出していることがわかる。

ラブラブセブ国際大学での英語学習の進捗については、10名の学生が予習復習によって学習進捗についていけると回答していたが、3名の学生はかなりの努力を要すると回答しており、一つ上の学習レベルへの挑戦に繋がっていることが窺える。放課後の学習時間が平均すると2時間以上であると答えた学生は6割近くにのぼり、日本にいた時よりも学習する時間が増えたという回答が目立つ。

留学の満足度としては、13名のうち12名が満足していると答えている。1名がどちらでもな

いと答えているが、その理由を見ると「単位互換が明確でないこと」「設備が未完成の部分があること」と記述があり、現地での学びに対する不満に該当するものではなかった。留学制度が一部未整備な部分を残したまま催行に踏み切ったため、学生には不便をかけることがあったのは否めない。年内にはラブラプセブ国際大学の工事もほぼ終わると考えられており、これらはまもなく解決する項目であると考ええる。その他、環境整備についてのコメントとしては、「ネット環境」への指摘もみられ、ラブラプセブ国際大学に係る環境整備は喫緊の課題であるといえる。

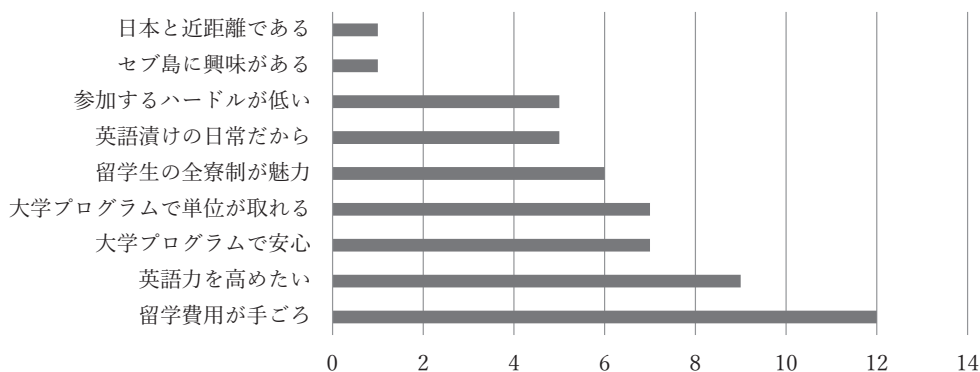
留学を通して感じる自らの英語学習への姿勢については、「以前よりも英語学習に積極的に取り組むようになった」「英語学習が楽しい」と答える学生が最も多く、留学中の英語学習が充実していることを映し出している。「再度、ラブラプセブ国際大学に留学したい」と答える学生も複数おり、短期留学では物足りなかった埋め合わせをしたいと考えているという。本留学の英語学習の良さについては、「英語に集中できる環境がよい」「充実した英語カリキュラムがある」「日常的に英語による交流がある」といったプラスの意見が寄せられている。「フィリピン人英語講師のわかりやすさ」についても、全ての学生が「わかりやすい」と回答した。さらに、聞き取り調査の中で質問すると、「発音は聞き取りやすく、少人数制のため手厚いサポートがあり理解度もあがっている」という回答が得られた。英語の多様性に対する寛容度は、本学のBECC^{*3}における多様性のある教授により、すでに育まれていた可能性も大きい。

また、生活面においては、「現地の学生がとてもやさしい」「不安に感じるものが全くない」「現地の学生は非常によく学習するので影響を受ける」といった肯定的な意見がみられている。特に寮生活について、全員が「満足している」と答えている。中でも、フィリピンや他国の学生との寮での共同生活と交流が何よりも楽しいという。さらに、ラブラプセブ国際大学の学生は全て日本語必修となっているため、現地の学生に日本語を教えることも貴重な体験であると答えている。渡航するまでは不安だったと回答した学生も、「大学の警備体制がよく、安心して過ごせる」と本留学を評価している。

この留学を通して自分に身に付いてきていると感じる能力に、「異文化理解力」と「語学力」が7割の学生の意見としてあがっている。また半数の学生が「コミュニケーション力」「行動力」「異文化対応力」の向上に自信を持っており、自己肯定感の高い上昇を鑑みると留学の効果は極めて高いといえる（図表6）。なお、在学生に留学を勧めますか、という問いには、全員が「勧める」と回答している。

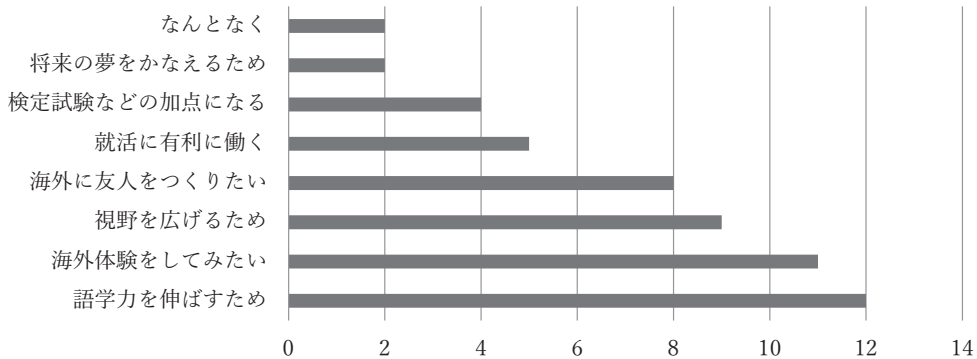
異文化での発見や驚きもあり、ストリートチルドレンの存在や街中の環境衛生の問題につい

図表3） 留学先としてラブラプセブ国際大学に決めた理由（複数回答あり）

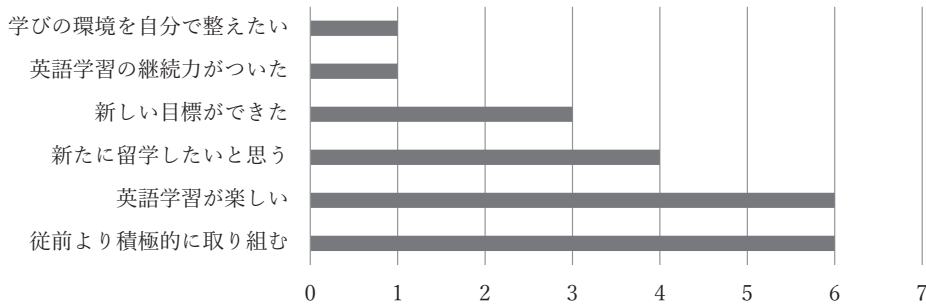


フィリピン英語留学に関する一考察

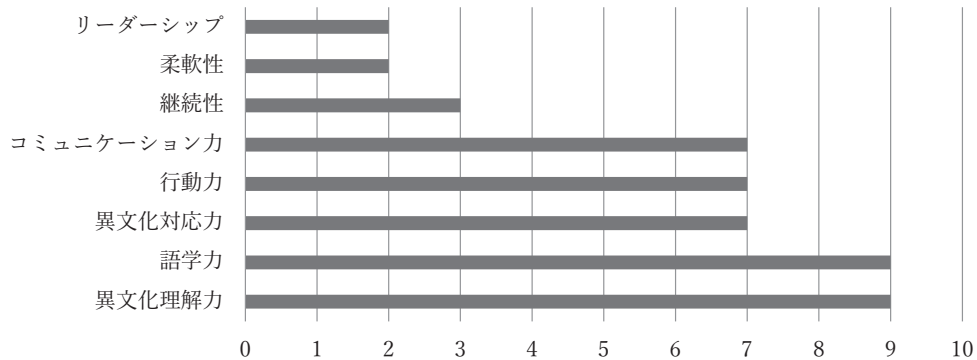
図表4) 留学の目的（複数回答あり）



図表5) 留学後、英語学習に対する姿勢はどう変化したか（複数回答あり）



図表6) 自分に身に付くと期待できる能力について（複数回答あり）



筆者作成

て言及する学生もみられた。これらを負の側面としてとらえるのではなく、開発問題や教育問題として考え、フィリピンの植民地の歴史などと絡めながら現地学生と共に、問題解決の糸口を模索する姿勢が生まれることを期待する。

今後の改善点として、「大学の環境設備を整えること」「広島文教大学の単位互換などについて明らかにすること」「現地情報（交通機関など）が不足している」「他国の留学生がいるとよい」といった意見があがっている。各項目とも急ピッチで取り組んでいる内容であることから、

まもなく改善されると思われる。他国の留学生については、現在、台湾や韓国から留学生が来ているが、順次 ASEAN 諸国の大学や教育機関との提携が進んでおり、ベトナムやタイなどからの留学生も今後は見込まれるという。

自分への反省としては、「留学前に勉強しておくことが大事である」という意見が数名から出ている。留学をより充実したものとするためには、絶対条件であろう。

現地で対面調査をした際に印象的だったのが、学生の生き生きとした表情である。コロナ禍で閉ざされた多くの活動や人的交流をこの留学で取り戻そうとするかのような勢い、明るさ、解放感を学生たちの表情から読み取ることができた。「人と繋がるのが楽しい」「国境を越えたコミュニケーションの素晴らしさを改めて感じた」という意見を聞き取ることができた。また、数名の学生から「人と比べる必要がないことに気づいた」という意見があがった。フィリピン人と接する中で、日本では、容姿、持ち物、成績、生活レベルなど多くの事象において、周りの人と比較することが社会の中に規範としてあることに気付いたという。人との比較や相違が日本では息苦しかったが、フィリピン人学生から、人との比較は必要ないこと、相違は長所であることを教わったと晴れやかに答える学生の姿から、大きな異文化を習得していることを感じた。

ラブラプセブ国際大学には、これまでの語学学校を中心としたセブ留学とは違った利点が数多くある。まず、語学学校ではなく正規の大学であることから、学習の質保証がされていること、留学生が全寮制で現地の学生との交流が十分にあること、留学期間は自分で選択でき、所属大学との合意で単位互換が可能となること、あるいは所属大学との遠隔授業を受講できる可能性があること、セキュリティには万全の体制を敷いていることなどである。これらの魅力をもって、多くの留学生を迎えることにより、より豊かで実りのある留学生活に繋がることを切望する。

4. ま と め

フィリピン英語留学は、現在、留学を志望する者の留学先として選択肢の上位にあげられるようになっている。日本からの距離が近いこと、留学費用が低価格であること、そして、自分に合った学習スタイルを選べることなどが大きな魅力となっている。昨今の日本の経済状況を考えると、欧米への長期留学には高いハードルがあり、多くの学生が留学そのものをあきらめざるを得ない状況にある。さらに、コロナ禍という事態が、学生から海外経験や人的交流の機会を遠ざけてしまったことは残念でならない。その中で、フィリピン英語留学は、経済的にも心理的にも留学へのハードルを低くすると考える。

一方で、小林が警告を発するように、パッケージ化されたレジャー感覚の短期英語留学が跋扈し、最終ゴールのない海外体験が消費されていることには疑問が残る。与える側もそれらを利用する側においても、その目的と結果を提示できない事態は避けなくてはならない。留学の目的については、計画を立てる際に学生が意識すること、そして、留学後に達成したい目標などを掲げて臨むことが大切となる。

2022年度より始まったラブラプセブ国際大学の留学プランは、正規の大学が提供する全寮制のプログラムであり、現地における交流も日常的に存在することから、多くの学生に魅力的に映るのではないだろうか。本学学生の調査結果から、留学を考える多様な層に自信をもって提供できるプログラムであると考えられる。学生13名の調査であること、また、留学を肯定的に捉えている層が集まっていることを考慮すると限定的な調査といえるが、今後留学を計画している学生には多くの示唆を与えてくれる。留学前の準備段階における学習、留学する目的、留学後

の目標設定などをプログラムに位置付けた上で、学生たちの留学を後押ししていきたい。

学生にとってリーズナブルな価格で留学に参加できることは、いまや最大の関心事であり、さらに所属大学の単位互換が可能となることは、留年や休学を避けることができるため、留学後のプランも立てやすくなる。英語母語話者ではないフィリピン人講師の英語をわかりやすいと捉え、英語の多様性に対する寛容性が育つことは、異文化への寛容性も同時に養うことに繋がる。

大学の環境整備は課題となっているが、ラプラプセブ国際大学への留学が学生のニーズにこたえるプログラムであることが今回の調査から明らかとなった。まもなく帰国する中期留学生たちは、どのような自己の変容を経験しているのか、帰国後のフォローアップが重要となる。さらなる調査の継続に努めたい。また、より多くの学生に安心して利用できるプログラムにするため、本学が取り組むべき整備と支援体制の充実をはかり、ラプラプセブ国際大学との連携を推進することは今後の課題である。

注

- *1: JAOS, 一般社団法人海外留学協議会の略称で、1991年に留学業界の健全なる成長を目指し設立された留学事業者団体である。留学の啓蒙、留学事業者のガイドライン制定、留学カウンセラーの教育等様々な活動を推進している。
- *2: ELF, English as a Lingua Franca の略称である。さまざまな母国語を話す人の一般的なコミュニケーション手段または伝達言語としての英語の教育、学習、および使用を指す。
- *3: BECC, Bunkyo English Communication Center の略称で、広島文教大学の英語学修専用施設である。全学科の学生に教養教育科目として英語の授業を行うと共に、グローバルコミュニケーション学科や教育学部の学生が専門的なスキル、高度な英語運用能力を修得するために必要な授業を提供する中・四国地区最大級の英語学修専用施設である。多国籍の講師が授業を担当している。

参 考 文 献

- ・一般社団法人海外留学協議会 JAOS (2019) Press Release, Dominance of America Shifts to Drastic Diversification of Destinations. New Era of Study Abroad Destinations Shown in 2019 JAOS Report. https://www.jaos.or.jp/wp-content/uploads/2020/03/JAOS-Survey-2019_JapaneseStudent191219.pdf. (2022年9月9日アクセス)
- ・一般社団法人海外留学協議会 JAOS (2020) 日本人留学生数調査2019調査レポート, <https://www.jaos.or.jp/newsrelease/2020>. (2022年9月9日アクセス)
- ・岩城奈巳・巽洋子 (2021) COVID-19による学生の留学に対する意識変化—大学生への調査を通して—, 名古屋高等教育研究, 第21号, pp. 187-206.
- ・株式会社国際協力銀行 (2021) 第3章経済概況, フィリピンの投資環境, 2021年10月号, JBIC, pp. 20-35.
- ・木村登志子・清水秀子 (2016) 短期留学プログラム参加者における異文化理解と学習動機付けの変容, 嘉悦大学研究論集, 59, pp. 75-99.
- ・Capital Asset Management (2022) フィリピン・リサーチ・レポート, http://www.capital-am.co.jp/research/pdf/2022/Philippines/report_20220225.pdf. (2022年9月10日アクセス)
- ・小林葉子 (2022) 日本人英語学習者による欧米とアセアン準英語圏への留学順序と目的, 岩手大学人文社会科学部紀要, 第110号, pp. 33-44.
- ・小張順弘 (2018) フィリピンの英語の商品化—現地調査から—, サービスの商品化がもたらす日比関係の変容に関する学際的分析, アジア研究所・アジア研究シリーズ, No. 96, p. 5-38.
- ・田丸祐輔 (2020) 日本人学生の留学の現状と課題—日本人学生留学状況調査の調査結果から—, ウェブマガジン留学交流2020年8月号, pp. 18-30.
- ・仲谷ちはる (2022) 短期オンライン留学の意義と課題, そして展望—効果的なバーチャル留学 (バリュエー) の構築を目指して—, 和洋女子大学英文学会誌, 57号, pp. 77-95.
- ・日本貿易振興機構 JETRO (2021) マニラ事務所作成レポート2021年3月, https://www.jetro.go.jp/ext_

images/_Reports/02/2021/964389cee29119cb/202103.pdf. (2022年9月10日アクセス)

- ・日本貿易振興機構 JETRO 海外ニュース (2022) ビジネス短信, <https://www.jetro.go.jp/biznews/2022/05/8eaaa675423839ec.html>. (2022年9月9日アクセス)
- ・羽井佐昭彦 (2017) フィリピン英語留学が日本人学習者の言語態度に与える影響, 相模女子大学紀要, 80, pp. 11-24.
- ・フィリピン経済ニュース Philippine Primer https://primer.ph/economy/top_news/business-news-2019-12-13/. (2022年9月1日アクセス)
- ・フィリピン統計庁, <https://psa.gov.ph/content/2020-census-population-and-housing-2020-cph-population-counts-declared-official-president>. (2022年9月10日アクセス)
- ・藤岡頼光 (2019) フィリピンに留学する人が増え続けている理由, 東洋経済オンライン, 2019年6月13日, <https://toyokeizai.net/articles/-/285097>. (2022年9月1日アクセス)
- ・村田晶子 (2022) コロナ禍の日本留学—外国人留学生の孤独とレジリエンス—, 多文化社会と言語教育, Vol. 2, pp. 1-15.
- ・横山泰彦 (2019) フィリピン短期英語留学市場の今後—国際共通語としてのフィリピン英語—, ウェブマガジン留学交流2019年5月号, pp. 1-8.
- ・李曉燕・橋本敬 (2016) 言語教育の商品化に伴う教育側の進化, 言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム報告集.
- ・Lee Jung Eun (2021) アジアの英語教育産業が形づくるトランスナショナルな移動—メゾ構造としてのフィリピンの韓国系英語学校を中心に, 立命館大学大学院国際関係研究科国際関係学専攻博士課程後期課程.
- ・渡辺幸彦・羽井佐昭彦 (2015) フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響: 継時的インタビュー及び参与観察を手掛かりに, 相模女子大学文化研究, 33, pp. 27-37.
- ・Whalen, B. (2020). "Education abroad in a post-COVID world." Inside Higher Ed, April 14, 2020. <https://www.insidehighered.com/views/2020/04/14/how-covid-19-will-change-education-abroad-american-students-opinion>. (2022年9月1日アクセス)

—2022年9月30日 受理—